



新入生へのメッセージ

大学時代にしかできない経験を

大阪教育大学長 長尾 彰夫

新入生みなさん、入学おめでとうございます。

さて、みなさんは、大学時代に何を経験してみようと考えていますか。もちろん、勉学に勤しむといったこともあるでしょうが、大学時代にしかできない経験、大学時代にこそしておくべき経験とは何かを考えてみてください。

例えば、リュックサックを背負ってしばらく海外を放浪してもいいし、1か月部屋にこもって読書に熱中するのもいい、サークル活動に没頭してもいいと思います。ただ、その経験が何の役に立つのかということはあまり考えない方がいいかもしれません。何のためにこういうことを経験しておこうといったことでは、その経験の本当の意味や価値をつかみ損なうことになりかねません。いずれにせよ、目先のことにこだわらず、今ここで何かに打ち込んでみる、そんな経験をしてほしいと考えています。それこそが、大学時代ならではの豊かな経験になるに違いありません。そのことをわたしからの「新入生へのメッセージ」とします。

多角的な目を もちましょ



教員養成課程長 石田 雅人

入学おめでとうございます。これからの学生生活を、将来を見据えた意義深い時間にするために、思考力と感性を磨くことに時間を割いてみませんか。いかにして磨けばいいのでしょうか。その一步は、多面的な視点を養うことです。それが感性の豊かさにもつながると思います。その点で、現在の大阪という地は、それを可能にする状況にあります。

「教育の在り方」に関してかまびすしく論議されています。教育の中立とは何か、民意は教育にどのように反映されるべきか、子どもの学力向上のために何をなすべきか、国際競争力の育成のためどのような方法が良いのか、などなど。少し大きい問題ですが、関心をもつことによって、「見通す力」を養いましょう。

「やれば出来る」 というチャレンジ 精神を



教養学科長 高橋 誠

新入生みなさん、大学生活は順調にスタートしましたか。現時点で将来の生き方の目標が定まっていなくても、チャレンジ精神をこの4年間の大学生活で育むことができれば、きっと将来の生き方の選択肢は広がると思います。

まずは目の前の小さな興味から出発しても良いのですが、物事の探求に「凝る」ということが大切です。これは勉学だけでなく趣味などにも当てはまることです。他にはない「自らのもの」と言えるに至るまで探求を持続してください。こうした「自らのもの」を諦めずに追求する時期が大学4年間です。4年間の各年次で「自らのもの」をどれだけ獲得したかが大学生活の充実度に繋がっています。「自らのもの」の獲得は、「やれば出来る」というチャレンジ精神を育み、生き方の選択肢を広げてくれるはず。そうした道程の出発点が大学1年次です。この1年を大切にしたいと思います。

志を高くもち 自己を確立 しよう!



夜間学部主事 田中 俊弥

ようこそ大阪教育大学へ。昭和24年(1949)に大阪学芸大学として再編された本学は、昭和29年(1954)、全国唯一の夜間の小学校教員養成5年課程(3年次編入を含む)である第二部をスタートさせました。第二部も、もうすぐ遷暦を迎えます。

本学の特徴のひとつは、「多様性」と「総合性」にあります。グローバルな時代社会のなかにあって、大切なことは、世界に開かれた個性であるかだと思います。志を高くもち、多様な仲間と切磋琢磨しながら、しなやかな知性をもった総合力のある人格をめざして日々研鑽につとめ、ゆるぎない自己を確立してください。

道は、進むところからできていく。ともに前進していきましょう。

いろいろな人に出逢って いろいろな経験を。



小学校教員養成課程 理数生活系数学専攻
北垣 千裕さん(22歳)
▶▶兵庫県・中学校(数学)に内定

一兵庫県内の中学校の数学で採用内定になったということですが、不安はありませんか。

北垣 クラス担任、クラブ指導、授業をどのよううまく両立させるのか、課題に思っていま

す。真面目すぎるといわれていますので、ひとりで抱え込まず、周りの先生方のサポートや協力を得られるよう、頼るところは頼りながら、教師生活をスタートさせようと思っています。

一教職をめざしたきっかけは。

北垣 1歳から保育所に通っていたので、小さい頃は保育士になりたかったです。小学校で、素敵な2人の先生に出逢って、教師に憧れました。ところが、中学校に入って、生徒会や部活はがんばったのですが、将来への夢があやふやになり、もやもやとしていました。わたしって本当に教師になりたいのだろうか。

教職志望が固まったのが高校1年のときです。担任が数学の先生で、わたしを理解し応援してくれました。大阪教育大学への受験を後押ししてくれたのもその先生でした。

一大学4年間はいかがでした。

北垣 ダンスサークルLSBで活動しました。メンバーに教員採用試験をがんばった仲間がたくさんいます。これからもつきあっていけるいい

仲間です。

一ところで、数学の先生になるということですが、数学の面白さは。

北垣 数学はひらめきだという人がいますが、わたしは少し違います。基礎の積み重ねがあつてはじめて難しい問題をも解くことができるところが面白いと感じます。難問も読み解くと、四則演算(足し算、引き算、掛け算、割り算)に行き着きます。数学は、中学生の嫌いな教科の上位に上がりますが、面白さを、生徒に教えていきたいです。

一教職をめざす後輩へのメッセージを。

北垣 大学時代にいろいろな人に出逢って、いろいろな経験をするのが大切だと思います。仲間とおしゃべりが大好きなのでたくさんの友人ができました。わたしの経験から、教職をめざすのであれば、教育実習以外にも学習ボランティア等で学校現場での指導体験を積んでおくことが、自信を高めることになるのではないのでしょうか。

🔊 今春、巣立つ卒業生を広報スタッフがインタビューしました。

卒業予定者INTERVIEW

自分主体で動き、いい仲間と巡り合って。

一教職をめざしたきっかけは。

太田越 中学校時代のバスケットボール部の顧問の先生に憧れました。先生からは、人間としての生き方を教えられました。特に「人の気持ちを考えられるようになれ」という言葉はずっと響いています。高校時代も教員になりたいという気持ちを胸に抱いていました。そして迷わず、大阪教育大学をめざしました。

一高校までバスケットだったのが、アメリカンフットボール部に転じたのですね。

太田越 新入生歓迎会でアメフトの先輩から説明を聞いて、明るくて和気あいの雰囲気が入りました。4年間はアメフト漬けでした。1年目は、先輩にーから教えてもらい、付いていくのがやっとでした。2回生からレギュラーでゲームに起用されました。

一ポジションは、オフェンスのレシーバーということですね。

太田越 クォーターバックからのロングパス

をキャッチし、タッチダウンに持ち込む役割です。バスケットボールで身につけた動きが、レシーバーの動きに役に立つということで選ばれました。

一アメフトの仲間や後輩へメッセージは。

太田越 4回生のときにはキャプテンを務めさせていただきましたが、ぼくのわがママを受け止め、最後まで付いてきてくれた同級生には感謝をしています。後輩の部員にも、口べたですが、最後まで信頼してくれたことに感謝しています。来年度、コーチとして引き続き部員の指導をさせていただけるので、1部リーグ昇格に向けて共にがんばろうと思っています。

一趣味は。

太田越 スポーツは見るのもやるのも大好きです。NBAプロバスケットボールのテレビ観戦は興奮します。

一最後に、大教生に対するメッセージを。

太田越 大学生となれば何をやるにも自分



中学校教員養成課程保健体育専攻
太田越 大輔さん(22歳)
▶▶兵庫県・小学校教員として勤務予定

主体で動くので、他人に流されず、自分がやりたいことを見つけてほしいと思います。ぼくはアメフトでかけがえのない仲間を得ることができました。大学時代にいい仲間と巡り合ってください。

教育関係以外の体験や、 考え方にふれることも大きな力に。

―教職をめざしたきっかけは。

太田 社会に貢献できる仕事をずっと考えていました。教員以外の道を考えていた時期もありましたが、子どもが好きで小さいときからピアノやヴァイオリンを習っていたこともあり、幼稚園や小学校の先生が自分には適しているのではないかなと思うようになりました。

大阪教育大学に入学して、入学当初は小学校の教員をめざしていましたが、特別支援教育を学ぶうちにその重要さに気付くようになりました。教育実習は小学校と特別支援学校に行きました。そこでの授業づくりに魅力を感じ、特別支援学校の教員を受験することに決めました。

―大学の4年間はいかがでしたか。

太田 同じ特別支援教育を学ぶ仲間から刺激を受けながら充実した学生生活を過ごしました。課外活動では、「聴覚障害学生と共に手話を学ぶ会」に1回生から参加しました。プライベートでは社会人のアマチュアオーケスト

ラに所属してヴァイオリンを弾いています。

―趣味は。

太田 音楽と海外旅行です。最近では、ドイツ、韓国、ベトナム、トルコなどを訪れました。父が教員で海外の日本人学校に勤務していた関係で、小さい頃から外国で生活する機会に恵まれたこともあり、様々な外国の文化に興味があります。

また、課外活動で勉強した手話を生かすために手話通訳の活動や、教員採用試験が終わってからは、ドイツの日本人学校で小学生に向けて手話の授業や、キャリア教育の一環で“ようこそ先輩”的な授業をさせていただいて楽しい時間を過ごしました。

―後輩へのメッセージを。

太田 学生時代にできるだけ多分野にわたって多くの経験しておくことをおすすめします。教職をめざしているからといって、教育関係だけにとどまらず、全く違う分野のアルバイトやボランティアなどを体験するのも大きな力になると思います。わたしも、意識的に福祉施設や民間

特別支援教育教員養成課程 病弱教育コース
太田 有紀さん(23歳)
▶▶大阪市立特別支援学校に内定

企業などで仕事を経験しました。特に教育大学にいとなく聞かぬことのできない、教育関係者とは全く違う視点、考え方にふれることができました。学校現場に身を置いたときにも役に立つと思います。

GOES THE DISTANCE

目標を立てて、それに向かって 努力することが大切。

―教職をめざしたきっかけは。

祖川 中学校時代の恩師に憧れたからです。ばくが所属していた陸上部と野球部の顧問をされていた。大変熱心な先生で、生徒一人ひとりにかかり、みくれる方でした。進路についても後押しをしていただき、工業高校に進みました。高校では陸上部に入り長距離を一生懸命に取り組み、目標である駅伝の全国大会出場を果たすことができました。何事にも目標を立ててチャレンジすれば、叶えることができると学びました。

―学部での4年間はいかがでしたか。4月からは大学院に進まれるのですね。

祖川 教員養成課程があり、学生数が多く、自然環境のよい国立大学が希望だったので、大阪教育大学を選びました。工業高校での学びを発展させるためにも学部では技術教育を専攻しました。

大学でも、陸上競技部に入り、長距離を続けました。忙しかったですが、好きなことができたので楽しく充実した4年間でした。大学院では技術教育全般により専門的な知識を学びたいと思っています。

―陸上競技部の活動で学んだことは。

祖川 競技活動以外にチームの運営の方も担当しました。部員のことを考えるだけでなく、OBとの連絡調整なども行いました。競技の駅伝は仲間との協力が大切なので、通じるものがありました。

友人としゃべることが好きなので、大切なのはやはり友人ですね。

―後輩へのメッセージを。

祖川 4年間はすぐに過ぎてしまいます。目標を立てて、それに向かって努力することが大切だと思います。



中学校教員養成課程技術家庭専攻技術コース
祖川 拓也さん(22歳)
▶▶大学院技術教育専攻に進学

自分の将来につながる勉学に意識的に取り組んで。

―教職をめざしたきっかけは。

朝枝 学校が好き、子どもが好きでした。なんとなく教師を意識したのは中学生のときです。その夢が実像となったのは高校2年です。バスケットボールをやっていて、骨折してしまい県大会の出場を断念したことがありました。焦りと悩みで苦しんだのですが、親身になって相談に乗ってくださったのが保健室の先生だったのです。同じ教職の仕事にも養護教諭という職種があり、子どもたちの心と体を診る大事な仕事だと知りました。わたしも養護教諭となって健康の面から子どもたちを支えたいと思いました。大阪教育大学を選んだのは、養護教諭養成課程があり、オープンキャンパスで、先輩の学生から親切にアドバイスをいただいたからです。

―大学4年間はいかがでしたか。

朝枝 目標が同じ仲間と刺激を合いながら過ごしました。スポーツではバスケットボールのサークルで活動しました。

活動の面では、奈良県橿原市内の小学校で養護教諭のボランティアを行いました。また、柏原市民病院では発達障がいの子どものための支援ボランティアを行い、「発達障がいにおける保護者と養護教諭の連携」について卒論をまとめました。

―養護教諭は1校に一人の少数職種。「ひとりでもがんばる」という気概が感じられます。

4月から東京の学校に赴任すると聞きました。

期待と不安の両方があると思いますが。

朝枝 東京は知らない土地なので学校の様子はどうか不安はありますが、その分、新しい出逢いもたくさんあると思います。楽しみたいですね。接客のアルバイトをずっとしていましたので、人と話し、関わり、つながることは好きです。初めての人とどううまくやっていく自信はあります。

―後輩へのメッセージを。

朝枝 振り返ると大学の4年間はあっという間でした。後輩の皆さんも、アルバイト、ボラン



養護教諭養成課程
朝枝 亜依さん(22歳)
▶▶東京都・高校養護教諭に内定

ティアも大事ですが、自分の将来の仕事につながる勉学に意識的に取り組んでいただければ、夢の実現に近づくことができると思います。

卒業予定者INTERVIEW

学生時代にこれがんばったと言えるものを見つけて。

―教職をめざしたきっかけは。

苗村 父が中学校の教師をしており、家で生徒の話を嬉しそうにしているのを見ていました。大変な仕事とは思っていますが、やりがいがあるのではないかと感じました。そして、父の母校である大阪教育大学を選びました。毎日、自宅の伊丹から2時間かけて通いました。

―大学時代の4年間はいかがでした。

苗村 特別支援の仲間たちと楽しく学生生活を送ることができました。2回生から大阪府立茨木支援学校、交野支援学校で支援員としてボランティアを行いました。大変充実した現場体験をさせていただき、その中で特別支援教育は教育の原点だと思いました。

―アルバイト体験が豊富だと聞いていますが。

苗村 東京ディズニーランドが大好きなので、大阪市にあるUSJ(ユニバーサル・スタジオ・ジャパン)でのアルバイトを2回生から続けています。大勢の観客の前にアトラクションの運

営を行いました。多くの人の前で話し、人と関わる経験をたくさん積みみました。幅広い年齢の方と連携しながら働いたので、コミュニケーション力や度胸はついたと思います。

―教壇に立ち、保護者への対応なども大丈夫ですね。

苗村 体力と度胸には自信があるので、「どんとこい」といいたいところですが、教師はなんといっても授業だと思うので、授業力をもっと身に付けたいと思っています。

―後輩へのメッセージを。

苗村 4年間で夢中になり、「学生時代にこれがんばった」と、人に言えるものを見つけて、一生懸命に取り組んでほしいと思います。また、就職に当たっては、キャリア支援センターのアドバイザーの先生方に大変お世話になりました。気軽に門を叩いてほしいですね。



特別支援教育教員養成課程
肢体不自由児教育コース
苗村 彰子さん(23歳)
▶▶豊中市・小学校教員に内定

諦めず努力をすれば 夢を叶えることができる。

一教職をめざしたきっかけは。

向 小学校時代の担任への憧れから、ずっと教職に就きたかったのですが、4回生の教育実習で授業がうまくいかず、ぼろぼろでした。自信を失い、教職を諦めかけていました。でも、5回生の教育実習で出逢った先生が大変素晴らしい先生でした。「最初からすぐにうまくいくはずがない。努力の積み重ねだ」とアドバイスをくださいました。その先生の後ろ姿から、教職ってやりがいのある仕事だと思い、子どもが好きだということは変わらなかったで、心を入れ直してチャレンジしたらいい結果が出ました。

一二部を選んだのは。

向 大学入試センター試験がうまくいかず、1年間、予備校に通いました。教師になる夢を持ち続けていたところ、予備校で出逢った先生に教えていただき、二部の存在を知りました。夜間に通うことができ、しかも1日2時間の5年間授業というスローペースが、わたしに

とってぴったりだと思いました。

一5年間の大学生活はいかがでした。

向 和歌山の自宅から通学していたので、課外活動はできませんでした。ただ、学生局の新生歓迎や卒業生を送る実行委員会等には参加させていただき、そこでは学生の自主的な活動の大切さを実感しました。

ひとりで勉強はつらいので、教員採用試験と一緒にがんばった仲間と励まし合いました。その仲間とは固い友情で結ばれています。もう会える機会が少なくなり、寂しいですが、学校現場へ出てからも、つきあっていける友達として共に成長していきたいです。

一後輩へのメッセージを。

向 仲間を大切にしてほしい。そして、諦めず努力をすれば夢を叶えることができるということです。

一抱負を。

向 家族の支えも有り難かったです。一番喜んでくれたのが祖母です。祖母は若い頃、先



第二部小学校教員養成5年課程(1年次入学)
向 奈津美さん(23歳)
▶▶高槻市・小学校教員に内定

生になりたかったけれど、様々な理由で断念したということです。家族の思いも背負ってがんばっていききたいと思います。

GOES THE DISTANCE

大学から離れて外でやりたいことを見つけることも大切。

一最初は私立大学に入学されたのですね。

徳富 中学高校とバレーボールをやっていたので、そのスポーツ推薦で関西外国語大学に入学しました。中学校の英語教師になるつもりでしたが、インターンシップで体験した小学校が素晴らしくて、自分に合っているなど感じました。1年の通信教育で小学校免許を取るつもりでしたが、3年間しっかり勉強できるところがあると聞いて、二部に編入学しました。学費が安いのも魅力でした。

一編入学後、休学して、海外に飛び出したのですね。

徳富 青年海外協力隊に参加し、アフリカに派遣されました。ぼくの財産であるバレーボールを生かし、スポーツを通じて青少年を育成するボランティア活動に取り組みました。

一教育の重要性を痛感されたとか。

徳富 アフリカで最貧国のニジェール共和国で活動をしたのですが、病気の予防や生活

にかかわる子どもたちの知識はすべて教育がかかわっていました。国を動かしているのも教育の力でした。

一昨年3月下旬に帰国し復学されて1年。卒業後は、もう少し勉強したくて、大学院に進まれるのですね。

徳富 専門にしているのが小学校の英語で、もう少し専門性を磨いたうえで、学校現場に赴任したいと思っています。指導教員の柏木賀津子先生からも背中を押していただきました。小学校英語を通じて、世界へ羽ばたく子どもたちを育てるのが夢です。

一後輩へのメッセージを。

徳富 ぼく自身、バレーボールや青年海外協力隊に参加することで多くの仲間、友人を得ることができました。後輩の皆さんも、大学から離れて外でやりたいことを見つけることもいいと思います。



第二部小学校教員養成5年課程(3年次編入学)
徳富 慎弥さん(26歳)
▶▶大学院実践学校教育FTコースに進学

一教職をめざしたきっかけは。

徳富 小学校5、6年のときの担任が素晴らしい方でした。本気で子どもたちと関わる先生で、怒ると恐かったです。あんな大人になりたいという憧れがありました。その影響で漠然と教師になりたいと考えていました。

ほめられたことや、 感謝された経験をヒントに。

—美術コースを選んだきっかけは。

寺田 小さい頃から絵を描くことが好きでした。中学校のとき、美術科のある高校に入学したかったのですが、両親の希望と折り合いを付けて、普通科の進学校に入学しました。勉強を頑張る一方で、部活は美術部に打ち込みました。

—就職活動はいかがでしたか。

寺田 デザイン会社に就職すると決めていましたので、一般企業への就活は行わず、3回生の時からデザイン会社にインターンシップで参加しました。その活動を見ていただき、社員として採用されることになりました。即戦力として認められたのが嬉しかったです。

—4年間の学校生活はいかがでしたか。

寺田 デザインのスキルアップをめざして、実践経験を積もうと、学生チャレンジプロジェクトの雑誌制作、音楽活動をしている学生が制作したCDのジャケットデザインなどを手がけました。また、デザインを請け負う団体「montee」を立ち上げ、様々なデザインを請け負ったり、

団体の宣伝としてフリーペーパーの発行を行いました。その実績をまとめたポートフォリオは、デザイン会社に内定をいただく大きな武器になりました。

即戦力のスキルを磨くために、依頼のあったデザインを率先して受け入れました。また、学生広報グループ・DAIKYO PRESS(大教プレス)の立ち上げから参加させていただきました。面白かったです。メンバーもどんどん増え、活動もゆっくりだけど着実に成長し嬉しく思います。

—後輩へのメッセージを。

寺田 何がしたいのか分からない場合は、逆に何をしたくないかという方向で考えると方向性が決まってくることもありますよ。自分がやりたいことと向いていることは違うと思うのです。自分には何が向いているのかを考えるポイントとして、人にほめられたことや、何かをして人に感謝された経験などをヒントに仕事を選んでいくといいのではないのでしょうか。その仕事が好きでなければ、ということはありません。



教養学科芸術専攻美術コース
寺田 彩乃さん(23歳)
▶▶ デザイン会社に内定

GOES THE DISTANCE



卒業予定者INTERVIEW

常にアンテナを張り巡らせて、 自分からチャンスをつかみ取る積極性を。

いただき、受験を決めました。中学校の英語にも関心がありましたので、欧米言語文化コースを選びました。

—就職活動はいかがでしたか。

塩谷 なんでも自分でやってみたく、人の力は借りるつもりはなかったのですが、途中で進路に迷いが生じ、キャリア支援センターや友人に相談をしました。自己分析やエントリーシートの書き方、面接のノウハウなどを教えていただき、大変勉強になりました。

—勉強になったというポイントは。

塩谷 分かっているつもりでも、自分のことで意外と知らないことが多いということに気づきました。自己分析の結果や友人の評価はだいぶ違っていました。自分がどのような職業に向いているのかを探るうえで参考になりました。

—エントリーシートや面接でどのようなアピールをされたのですか。

塩谷 採用担当者には、陸上競技部での

活動に注目してもらい、何でも真面目にこつこつ最後までやり遂げたところを評価していただいたようです。陸上は4回生の秋まで行い、昨年11月には目標の駅伝にも出場できました。

—後輩へのメッセージを。

塩谷 やはり客観的に自分を見る努力をすべきだと思います。また、社会人となれば、約束の時間に遅刻しないということが大切です。時間を守るという習慣は、学生のうちから生活の中で身につけて置くべきだと思います。

大学時代は時間があるので、目標がなければだらだら過ごしてしまいがちです。アメリカでの語学研修留学で、外国人学生の姿勢から痛感させられたことですが、待っているのではなく、常にアンテナを張り巡らせて、自分からチャンスをつかみ取る積極性が求められています。



教養学科文化研究専攻欧米言語文化コース
塩谷 彰久さん(22歳)
▶▶ JR西日本に内定

—クラブ活動の陸上競技部でしっかりがんばったそうですね。

塩谷 陸上の長距離走を思い切りできる大学を捜して、オープンキャンパスに参加しました。陸上競技部員から親切・丁寧に説明して



この規模と演奏レベルの高い
オーケストラは他の国立
教員養成系大学には存在しません。
大切に育てていきたい。



「素晴らしい学生に、素晴らしい教師陣、そして素晴らしいオーケストラ。講座主任として音楽コースの教育のレベルの高さをオープンキャンパスなど、機会がある度にアピールしています」

父が音楽好きで、二人の息子を音楽家の道に歩ませました。「兄はチェリスト。自分は11歳からフルートを始めました。ピアノを弾くことから始めましたが、小学校高学年のときにオーケストラを聴きフルートに憧れました」

東京藝術大学音楽学部器楽科に入学。卒業後、大学院音楽研究科修士課程に進み、1983年修了。25歳でドイツの国立フライブルク音楽大学専攻科に留学。ウィリアム・ベネット氏に師事しました。

「この留学が、人生の転機になりました」。心から信頼できる先生に巡り会うことができ、初めは今までの演奏を全否定されたといいます。「入試に失敗、異国の地での1年間の浪人生活も経験し、一から出直して没頭しました。演奏するということに対しての試行錯誤の毎日でした」

帰国後の1987年から、生まれ故郷である大阪に活動の拠点を移し、大阪教育大学、大阪音楽大学で後進の指導に当たる傍ら、これまでに12回のリサイタルを催すなど、盛

んにソロ及び室内楽活動を続けています。また、現代作曲家の新作の演奏にも力を注ぎ、その功績が認められて2003年、日本の音楽展特別奨励賞を受賞。ピアニストとしても多くの外国人音楽家と共演しています。

学生の教育指導について、「わたしたちの学生時代は楽譜をじっくり読み込んで自分なりに解釈し、練習を重ねて演奏をしました。ある意味大変でしたが、オリジナルなものを生み出すことができたように思います。最近の学生は新しい曲に取り組む際、まずはCDを聴いてから練習を始める。ネットで配信される動画を見て、もうその曲を熟知したかのような錯覚に陥っている。果たしてこれでよいのでしょうか。楽譜を読み込み、自分自身のイメージを膨らませ、構成を考え仕上げていくという過程を経て初めて説得力のあるものができるのだと思います。努力の結果が積み出てくるような演奏が求められると思います」

「新しい演奏法を発見しました。そのイメージを掴んだところです。また、初心に戻って

一から曲を見直し、深く研究したいと思っています」。ソリストとして、さらなる高みをめざし飽くなきこだわりをもち続けています。「オーケストラは音楽の総合体であり、大学の象徴的存在です。この規模と演奏レベルの高いオーケストラは他の国立教員養成系大学には存在しません。大切に育てていきたいです」

「趣味は」と尋ねると、「鉄チャン」という答えが返ってきました。「電車の運転席の後ろに陣取ってかぶりつくのが好きなのです。幼いころから利用している阪急電車のことはなんでも知っていますよ」



日常の仲間関係を超えて、
子どもの援助をみんなで
考えていく。



「教師の不登校の問題がいま、学校現場で起きているのをご存じですか。大学を出たばかりの教員が、担任するクラスの子どもたちをうまくまとめることができず、いわゆる“学級崩壊”状態になり、深刻な挫折を味わってしまう。そして、学校のなかで孤立し、出口のない苦しみに入り、バーンアウトしてしまうケースが増えています。管理職が教師の自宅を“家庭訪問”したり、教師の保護者との相談にのったりするということが起こっています」

学級崩壊は、若い教師だけではなく、ベテラン教師のクラスにも多く起こっているといわれています。保護者に対する教師の説明責任が厳しく問われるようになったこともその背景にあります。いじめ、不登校、学級崩壊、児童虐待、ひいては教師の早期退職などの課題を解決する手段の1つとして、教師のチーム力を高める「チーム援助」があります。

「チーム援助」とは、学校現場において、援助ニーズが大きい子どものために、学級担任、養護教諭、スクールカウンセラー、福祉の専門家、保護者などがそれぞれの専門性を生かしてチームを組み、サポート案を考え、援助を提供することです。

水野准教授は、この「チーム援助」を、大阪府内の小・中学校などに実際に導入し、自ら

もその会議に毎回出席、専門であるカウンセリング、学校心理学の立場からアドバイスをしています。その実践は先進的だとして、全国の学校関係者から注目を集めています。

広報スタッフが今年1月下旬に、月1回開かれている援助会議を府内のある小学校に訪ね、その議論の様子取材しました。会議では、気になる子どもについて、本人や友人、家庭や保護者のことなど、担任や養護教諭、生活指導担当教員らが情報を交換していました。そして随所に、水野准教授や管理職教員が質問を投げかけ、意見を述べていました。

「マスメディア、福祉、製造業、そして最近では医療などの分野において、チームで対応するということは当たり前になっています。学校は遅れているのではないのでしょうか」

学校現場には、“学級の子どもと向き合うのは担任”という“学級王国”の考えが根深くあります。担任一人で学級をみる、それができて教師とし

て一人前だというのです。「他の先生に援助を求めることは恥であり、担任教師のプライドが傷つくという意識があります。カウンセリングをやっても、なかなか相談できない先生方もいらっしゃいます。教師は子どもを管理する責任があると思うとなかなかチーム援助に踏み込みません。管理する責任もあるけれども、子どもを援助する援助者としての役割もあるのです。そこに気づくことでチーム援助がスタートするのです」

学校においてチームで子どもの課題の解決に当たるという考え方は新しいものではありません。これまでも学年団を中心に教師同士が集まり話し合いを重ね、子どもの問題を解決した事例はたくさんありました。しかし、それは“日常的な連携”であって、どちらかというとインフォーマルな関係が優先される傾向がありました。「チーム援助」はあくまでフォーマルな会議です。日常の仲間関係を超えて、子どもの援助をみんなで考えていくシステムだといいます。

「養護教諭はメンバーに欠かせません。教師とは違う視点で日頃、子どもを見ていますから。担任や生徒指導担当教員がみることで、できない子どもの様子を知って驚かれることがあります」

管理職だけでなく、学校関係者みんながチームとなって、子どもを多面的に理解し、保護者と信頼関係を構築し、学校をよりよい方向に進めていくための、“仕掛け”の1つとしての「チーム援助」を学校現場に定着させることが、水野准教授の大きな仕事となっています。



「授業研究と教師の成長」。木原教授が現在、力を入れている研究テーマの1つです。「教師という仕事は、日々授業をこなしておればいいというものではありません。今日より明日と、常によりよい授業をめざして、授業の目標や内容を吟味し、その方法を工夫しなければなりません。そのためには、常に研究マインドをもち続け、仲間と一緒に授業づくりを進める姿勢が求められます」

そのテーマの実現に迫る大学院の講義の1つとして「教職ファシリテーター論」(夜間大学院・実践学校教育専攻、後期・毎週木曜日)があります。広報スタッフは1月26日(木)、平成23年度・第14回目の授業を取材しました。

「学校現場での実践研究、いわゆる『校内研修』を企画・運営する立場にあるのが研究主任です。受講者たる現職教員に、そのための知識やスキルを獲得してもらうのがこの講義の目的です」

講義のプロセスは、前半で日本における校内研修に関する理論(その意義、歴史や国際比較、企画・運営手続きに関するモデルなど)について、木原教授が解説します。次に、いくつかの事例を分析して、理論の実践化を促します。そのうえで、受講生自身が所属校で携わってきた校内研修に関して、その問題点を振り返るとともに、それを改善するための方法等を盛り込んだプランを作成します。これらのパートの学習スタイルはワークショップやポスターセッションなど、双方向のものが主体です。前半も含めて、いずれも、木原教授が得意にしているICTを駆使した指導で、効果を上げています。

16人の受講生は、多くが学校現場でミドルリーダー的な立場にあります。この日の授



常に研究マインドをもち続け、仲間と一緒に授業づくりを進める姿勢が求められている。

業内容は「所属校の2012年度の校内研修プランのポスター発表と相互批評」でした。ポスターに書かれた発表内容に対し、メンバー同士が意見をたたかわせます。自分の力量アップ、明日からの授業運営の向上につながると思って、真剣そのものでした。

一方、第二部小学校教員養成5年課程の学生に対しては、先に紹介した「授業研究と教師の成長」に加えて、「学校を基盤とするカリキュラム開発」や「ICT活用などの授業における教育メディアの利用」などに関する講義や演習を担当しています。その1つ、「教育

学特論Ⅱ」(後期・毎週木曜日)の授業では、NHK学校放送番組のディレクターや現職教員に講義に参加してもらい、放送番組を活用した授業プランを実践的に検討する場面を受講生に提供しています。それは、教師をめざす学生にとって貴重な経験になっています。また、大阪市立学校園と連携した学校評価や、授業力アップサポート事業など、大学と学校現場との連携に関する研究的活動も繰り広げています。





「研究室内ではなく、外へ出て学生とのフィールドワークや、地域の人と連携して、実践的に追究するのがわたしの仕事スタイルです」

研究テーマは住居学・住生活学です。“住居学”とは、「住まいと住まい方、住みやすさを住み手の立場から考え、家づくりまちづくりに生かす研究」だといいます。

研究室では現在、学生（11人）と共に住まい学習やまちづくり学習に関わっての実践活動を行っています。

その1つは、大阪市立住まいのミュージアム（大阪市北区、愛称：大阪くらしの今昔館）とのコラボレーションで、博物館の展示室や実物教材を活用した住まい学習の実践研究です。

2007年度からは、ミュージアム内の江戸時代の町並みを実物大で再現した展示室の空間を使って、学芸員やボランティア、学

生と一緒に、子どもたちに住まいと暮らしの文化を学んでもらう体験型の学習イベントを毎年、企画・実践しています。

2つ目の日本学術振興会の受託事業「ひらめき☆ときめきサイエンス」も、ゼミ学生と共に運営しています。これは、都市祭礼の住文化を生かしたまちづくりに関連して、八尾市の八尾木地区で行われる「民芸づくりものまつり」を子どもたちに体験してもらう学習イベントです。つくりものとは、祭礼のお飾りの一種で、生活道具や農作物などを使って動物や人形などを作り、その趣向で見物人を驚かせるものをいいます。

八尾木では、野菜を使ったつくりものが町内10数か所に展示されます。イベントでは、つくりものの制作体験を通じて、子どもたちに地域の伝統文化を知ってもらい、つくりものの展示空間となる町にも目を向けてもらいます。



「教養学科の学生は教員免許の取得をめざしていない場合でも、教育大学の環境の中で、教育活動にかなり関心と理解をもっています。スタッフとして活動する中で、自らも地域の伝統文化やそれを支える人たちを知り、また、子どもたちとの関わり方を学んでいきます」

3つ目は、大学の地域貢献事業として、2008年度から教養学科美術講座の五明真准教授と合同で、美術コースの学生たちが柏原市内のJR柏原駅周辺の店舗シャッターに絵画を描く活動を進めています。毎年9月～10月に実施され、これまで8軒、延べ20人を超える学生が参加しています。

「毎年1～2軒ですが、地域の人たちには好評をいただいています。3日の制作期間中に、通行人からも声を掛けていただいたりして学生の励みになっています。多様な専門分野の教員と学生がいる教育大学ならではの取り組みだと思っています。学生たちにとって、学外での活動は、住まいやまちづくりに関わる人たちに接する機会となっています」

「わたしは地元・柏原市のまちづくり関係の審議会に携わった経験から、大阪教育大学の学生が、柏原市のことについてもう少し関心を持ってもらいたいと思っています」

日本野鳥の会の会員で、バードウォッチングが趣味。「柏原キャンパスは、樹木が豊富なので野鳥も多いです。気に入っています」



卒業生CATCH!

CATCH!
Masato
Yamashita



土の可能性を探る



山下 真人さん (31歳)

大阪教育大学大学院教育学研究科
美術教育専攻2005年修了
陶芸作家

「生でふれようアーティスト 土の可能性を探る」と題するワークショップが1月25日(水)、本学柏原キャンパスで開催されました。

講師を務めた本学出身の山下さんは、陶を用いた空間表現を行っている若手陶芸作家です。陶のもつ「強さと弱さ」という対極にある両性質を生かして作品の制作を行っています。「細くてしなやかな作品でありながら、存在感がある。そのテーマを読み取ってくだされば」。筒状で一见キノコをモチーフにした作品に、学生たちの関心が集まっていました。

ワークショップのテーマは「和紙と土を触りながらつくる『かたち』」。参加した約20人の学生らは和紙と土にふれながら、自分が面白いと思う「かたち」を見つけ、制作に取り



組みました。

山下さんは、兵庫県三田市にアトリエがありますが、母校である大阪教育大学を会場に作品の展示とワークショップを行うのは初めての試みです。「ぼくにとっても刺激的な取り組みでした。こういう場を与えていただき有り難く思います」

兵庫県出身。美術の教師をめざして兵庫教育大学芸術系専修コース(美術分野)に進みました。素材である土と対話しながら制作に取り組む現場の面白さを体験するうちに、作家を意識したといいます。

同大を卒業後、大阪教育大学大学院教育学研究科美術教育専攻に入学しました。稲富啓一郎教授に師事し、2年間学びました。

第7回国際陶磁器展美濃 陶芸部門銀賞・岐阜県知事賞のほか、第19回日本陶芸展準大賞・日本陶芸展賞、現代陶彫展などを次々と受賞しました。

「ぼくが陶芸作家になると言い出したら、教職にある父から反対されました。やはり、教師になってほしかったみたいです。いろいろな賞で認められるようになりますと、観覧に来てくれるようになりました」

後輩には「2年間一生懸命に制作活動に取り組むことができましたが、振り返ってみると、学生という特権を活用し、もう少しどん欲にやっておけばという反省はあります。月並みですが、学生時代に自分のやりたいことに思い切りぶつかってほしい」とエールを送ります。

profile

- 1981 兵庫県に生まれる。
- 2003 兵庫教育大学 芸術系専修コース(美術分野)卒業
- 2005 大阪教育大学大学院 教育学研究科 美術教育専攻 修了
- 2004 第9回日本現代陶彫展 マケット展 入選
第42回朝日陶芸展 入選
- 2005 第7回国際陶磁器展美濃 陶芸部門銀賞・岐阜県知事賞
- 2006 第5回出石磁器トリエンナーレ 佳作賞
第44回朝日陶芸展 入選
- 2007 第19回日本陶芸展 準大賞・日本陶芸展賞
The 4th World Ceramic Biennale
2007 KOREA 入選



卒業生CATCH!

CATCH!
Yoshiyuki
Matsunaga



松永 義之さん（28歳）

教養学科スポーツ専攻2007年3月卒
大阪府立堺西高等学校教諭

大人への“壁”のような存在に



水泳部の部員たちと

「生徒に対し叱るときはきちんと叱ることができる、父母のように守ってあげるとかいい教師をめざしています」

高校生にとって大学を出たばかりの若い教師は身近で、生徒にはお兄さん、お姉さん、友達のように接してしまう傾向が強いといいます。教師と生徒の関係がフレンドリー過ぎることに疑問をもっており、「大人への“壁”のような存在」として教職生活を歩もうと決意しています。

5年前に本学教養学科スポーツ専攻を卒業。4年間の講師経験を経て、今年度から現任校に赴任しました。保健体育科を担

当し、部活は水泳部の顧問を務めています。

大学4年の夏まで水泳ひと筋の生活を歩んできました。「1歳のときに母に連れられてスイミングスクールに通い始めたのが水泳との出会いです。中学高校時代に水泳部に所属、大学でも4回生の夏まで競技生活を続けました」

教職課程は受講していたが、教師になるとは思ってはいなかったといいます。「母校である大阪府立高校で非常勤講師をさせていただいているときに恩師に出会い、改めて指導を受けました。恩師は、先生という仕事は大変だぞといったいながら、喜んでくれまし

た。よし! と教師という仕事に意欲とやりがいを感じました」

いまだきの高校生について、「勉強でもスポーツでも、全体的に学ぶ意欲が低いと感じます。挑戦をしない、失敗をおそれて立ち止まってしまうところが見えます。自分の殻の中に閉じこもってしまい、自分の可能性を見切ってしまう。自分はこんなものだと。豊かで何でも与えられて成長したことが要因かもしれません」

大学時代に学んだことが、現場でどのように役立っていますか? という質問には、「一斉講義で学んだことよりも、双方向のコミュニケーションを重視した授業が印象に残っています。大学を卒業して1年目から担任として学級運営を任されるケースが多いわけですから、学校現場の状況がリアルに感じ取れるような授業を多く取り入れてほしいですね」と話します。

後輩には、「社会人としてのマナーを大学時代に身につけておくといいと思います。遅刻をしない、時間を守ることが第一ではないでしょうか。周りに気を遣うことのできる人間になってほしいと思います」

趣味について、「プライベートでも、ランニングや、自転車で走るなど、時間があれば体を動かしています。心も体もほぐれます」



STUDENTS NOW!

平成23年度学生表彰決まる 東日本震災ボランティア学生などを顕彰

平成23年度 大阪教育大学「学生表彰」の受賞者が選ばれ、3月9日(金)、事務局棟大会議室で表彰授与式が開かれました。

学術・課外活動、ボランティア活動、人命救助、災害救助等において顕著な功績があり、他の学生の範となる学生を顕彰するもので、

今回は2個人が学長表彰、2個人・6団体が学長特別表彰の栄誉を受けました。

受賞者(団体)の氏名と、受賞理由(概略)は次のとおりです。(順不同・敬称略)



《学長表彰》

■**浅田鈴佳**(あさだ・すずか)＝写真左＝大学院教育学研究科保健体育専攻2回生【業績概要】陸上競技部に所属し、ハンマー投において、平成22年度は、第94回日本陸上競技選手権大会7位入賞、天皇賜盃第79回日本学生陸上競技対校選手権大会第4位などの成績を収め、学長特別表彰を受賞しました。平成23年度は、同第80回大会で優勝を果たすなど、2年間にわたり、課外活動において特に顕著な功績がありました。

■**玉木壽成**(たまき・ひさなり)＝教養学科スポーツ・健康科学・生活環境専攻スポーツコース4回生【業績概要】水上競技部に所属し、フィンスイミングにおいて、平成21年度は第21回フィンスイミング日本選手権大会で入賞、第15回フィンスイミング世界選手権に出場し、学長特別表彰を受賞されました。

平成22年度は第22回フィンスイミング日本選手権大会CMAS(クマス)ビーフィン100m・200m第2位、50m第3位入賞など、4年間にわたり水上競技部で活躍、課外活動で特に顕著な功績がありました。

《学長特別表彰》

■**藤井友理香**(ふじい・ゆりか)中学校教員養成課程美術・書道専攻書道コース3回生【業績概要】公益社団法人日本書芸院が主催する「第16回全日本高校・大学生書道展」で最高賞の大賞を受賞(全国から応募された10,774点からわずかに51点だけが選出される超難関の大賞受賞)、学術において特に顕著な成果を収めました。

■**福壽亮太**(ふくじゅ・りょうた)教養学科芸術専攻美術・書道コース3回生【業績概要】奈良県などが主催する「第58回日本学書展」において、昨年に引き続き、特賞(知事賞)を受賞(特賞総数13点であるが、大学生の特賞受賞は2点と限定されている)、学術において特に顕著な成果を収めました。

■**学生チャレンジプロジェクト「しゃべり場」**【業績概要】平成23年度学生チャレンジプロジェクト採択企画。学生チャレンジプロジェクト「しゃべり



場」は、聴覚障がい学生自らが、障がいのない学生とともに、手話や指文字等を通して、ともに学び語り合う場、交流の場としての「しゃべり場」づくり、障がいのある学生も共に学びあう大学づくりをめざすなどの、課外活動における功績が認められました。

■**女子ハンドボール部**【業績概要】平成23年度全日本学生ハンドボール選手権大会準優勝。平成23年度西日本学生選手権大会優勝など、課外活動において特に顕著な成果を収めました。

■**東日本大震災被災障がい者支援プロジェクト**【業績概要】特別支援教育専攻の学生を中心に、五月祭や神霜祭においてクリアファイルや特産物販売を行い、その収益金を岩手県の特別支援学校や障がい者作業所に寄付しました。被災された障がい者やその支援状況を知らせる展示等による啓発活動や、被災した障がい児支援、レスパイトケアの活動を継続的に行うなど、社会活動における貢献が認められました。

■**東北応援団**＝写真右＝【業績概要】第二部の学生を中心に、宮城県石巻市で避難所の清掃や瓦礫撤去作業などの支援活動、また、大学祭のバザーの売上金を義捐金として被災地に寄付しました。さらに、学内においては、東北の現状を多くの学生に知ってもらう報告会を開き、継続的に「伝える」活動を行うなど、社会活動における貢献が認められました。

■**東日本大震災復興支援ボランティア**【業績概要】宮城教育大学の要請により学内募集した支援チームに参加、7月30日～8月6日の間被災のため授業の遅れている宮城県内の中・高5校で、学習支援を行いました。また、現地においては、各自が自発的に様々なボランティア活動を行うなど、社会活動における貢献が認められました。

■**スタディー・アフター・スクール(SAS)**【業績概要】放課後学習支援活動として、平成17年から継続的に活動を行っており、現在は柏原市内の小学校6校において、週2～3回、年間40～60回の活動を行っています。自主運営により、5～7人の学生がチームを組み、学習支援・特別活動・創作学習等の様々な活動を行い、社会活動における貢献をととして認められました。

附属学校園ウォッチ

附属平野小学校が平成23年度授業研究発表会を開催

附属平野小学校は2月11日(土)、平成23年度授業研究発表会を開催しました。研究主題は「学び合い活動を通して個の『考える力』を育てる授業づくり(第2年次)～『考える力』の変容を捉える～」です。

本校では、『ひとりで考え、ひとと考え、最後までやり抜く子ども』を学校教育目標として掲げ、今年度でちょうど50年目を迎えました。

当日の発表会では、表情豊かに自ら考える子、思いやりをもって友だちと考える子、アドバイスを受け入れながらよりよい姿に近づけられるまでやり抜く子…の育成をめざして、栄養教諭も含めた全教諭が授業を公開しました。「表情豊かにいきいきと取り組んでいましたね」「下級生に思いやりをもって相手に合わせた活動を想定されていましたね」「学習の視点を明確にしたことで、その視点を意識した子ども同士の声かけができていましたね」。これらは、研究発表会の参観者から寄せられた声です。

本校の授業研究とは、学校教育目標の子ども像の育成を支える態度や能力の中で、「考える力」に重点を置き、その力を育てる活動の最適化として「学び合い活動」を機軸に授業づくりを進める研究です。その第2年次として、子ども間におけるルーブリックの共有、コミュニケーション、全体での振り返りなどのプロセスを大切にしながら、「考える力」の変容を捉える指導者のはたらきについて追究してきました。また、京都大学大学院教育学研究科の田中耕治教授を迎えて、思考力・判断力・表現力を育む授業づくりやパフォーマンス評価の講演会を開催



図画工作科の公開授業

し、研究課題の解決をめざしました。

このような研究の継承と第3年次への発展に向け、大阪府教育委員会・大阪市教育委員会・堺市教育委員会の後援、ならびに、大阪教育大学との連携のもと、引き続き、研究の灯火を子ども・保護者・地域、そして、公立学校へ照らし続けたいと考えています。

附属天王寺小学校が研究発表会を開催



1年生国語「ろくべえまってるよ」(灰谷健次郎作)

附属天王寺小学校は、2月18日(土)に平成23年度研究発表会を開催し、全国から約800人の参加がありました。天王寺地区共同研究テーマ「人間と科学の調和を拓くリテラシー教育」を受け、「創造性を育成する授業Ⅱ」をテーマに充実した研究発表会となりました。

午前の全体会では、創造性を育成するために重視するポイントについて森保研究部長の説明があり、その後21の授業が公開されました。午後は各教科等の9つの分科会を開き、提案や授業について討議が行われました。その後、林龍平教授(天王寺地区共同研究協議会アドバイザー)をコーディネーターに、柳本朋子教授(算数)、小島律子教授(音楽)、手取義宏准教授(社会)、佐藤賢司准教授(図画工作)をパネリストに、「学校教育と創造性について」をテーマにしたシンポジウムも行われました。



池田地区附属学校研究会が 研究協議会を開催



附属高校池田校舎の公開授業(総合学習)「世界がもし100人の村だったら」
～高校生による、中学生のためのワークショップ～



附属池田小学校の道徳授業
「いのちをみつめよう～ブラックジャック」

本学池田地区附属学校研究会は2月24日(金)、附属池田小学校、附属池田中学校、附属高校池田校舎を会場に研究協議会を開催し、約900人が参加しました。

池田地区附属学校小中高では、「自立し協同する力を育む教育」をテーマに共同研究を進めてきました。「生きる力」をもった社会に貢献できる人間育成をめざしたもので、「コミュニケーション力を基盤として」をサブテーマに自立と協同の姿を明らかにしています。

2年次に当たる今年度の研究では、児童・生徒が自らの学習活動の中で、豊かな言語活動、授業を展開してきており、各教科・領域にわたる公開授業や研究協議会でその成果の一端を紹介しました。

てんゆうツイッター

天遊twitter

平成24年度の政府予算案のうち、国立大学法人運営費交付金を含めた国立大学関係予算について述べてみます。ややこしい数字の説明は省きます。

運営費交付金では、対前年度▲162億円、▲1.4%という計算になります。これは過去最高の下げ幅ですから、状況はますます苛烈になってきたという認識が正しいのではないかと思います。

一方、授業料免除枠の拡大等の成果ももちろんあります。なかでも「国立大学改革強化推進事業」として138億円が新たに措置されたことは、画期的なことです。これに当たっては、昨年12月19日に財務大臣と文部科学大臣が合意し、民主党政策調査会長が確認し、それぞれ署名された「平成24年度国立大学運営費交付金等について」と題する文書があります。それによると、「今後の我が国の再生に向けて…(138億円)を新設する」ものであり、「具体的な国立大学改革の方針については、…文部科学省内に設置したタスクフォースにおいて検討を行い、…速やかに改革に着手する」とされています。

本学ではこれまで、昨年6月に公表された国大協の「国立大学の機能強化」の方策を踏まえて、京都教育大学及び奈良教育大学との連携を推進しているところです。本年10月からは双方向遠隔授業システムが稼働し、当面、教養科目の双方向授業が開始されますが、さらにこの新設された改革強化事業の趣旨を踏まえて一層、連携の方策を進める必要があると考えています。

国の財政状況と相まって国立大学の財政は苛烈さを増す一方ですが、このように「連携」をキーワードとする機能強化の方策を進めることが当面の活動となるものと考えています。(理事・岩川雅士 2月23日記)

＜キリトリ＞

天遊vol.21アンケート

●本号でよかった記事を下から選んでください。
(3つまで。その他は具体的にお書きください。
【 】 【 】 【 】
(その他)

- ①新入生へのメッセージ
- ②卒業予定者インタビュー「Goes The Distance」
- ③ラボ訪問
- ④卒業生CATCH!
- ⑤STUDENTS NOW
- ⑥附属学校園ウォッチ
- ⑦TOPICS
- ⑧平成24年度公開講座

●取り上げてほしい記事がありましたらお書きください。
()
●本誌をどこで手にされましたか。
()
●本誌をお読みになってのご意見・ご感想などをお聞かせください。

●次号以降、毎号「天遊」の送付を希望される方は記載をお願いします。
(一度、送付希望ハガキをいただきました方は、再度お申し込みは不要です。)

どちらかに☑をしてください

- ☐ 次号以降、毎号「天遊」を送付希望します。
- ☐ 今後「天遊」の送付を停止します。

ご住所 〒

お名前

お電話番号

※お預かりした個人情報 は広報誌「天遊」の送付以外には使用致しません。

01 卒業生の和田淳氏が 第62回ベルリン 国際映画祭「銀熊賞」



本学卒業生で現在本学教養学科芸術専攻の非常勤講師である短編アニメーション作家の和田淳(わだあつし)氏が、世界三大映画祭の一つである第62回ベルリン国際映画祭で「銀熊賞」(審査員賞)を受賞しました。同氏が監督を務めたフランスの短編アニメーション映画「グレートラビット」が、高く評価されたものです。

和田氏は、教養学科芸術専攻美術コースで学び、3回生の時に独学でアニメーション制作を始めました。これまでに短編やアニメの国際映画祭で数多くの賞を受賞し、2007年からは本学非常勤講師としてアニメーションを教えています。

芸術講座の江藤亮准教授は「平成22年のベネチア映画祭での上映も驚きましたが、今回はそれを上回っています。和田君には、非常勤講師として芸術専攻の授業を担当していただいているので、直接学んだ学生たちも大変喜んでおります。現在は在外研修員としてイギリス滞在中ですが、今年9月に帰国してすぐ、後期の授業を担当される予定です。これからも、本学の学生に夢と希望を提供し続けて欲しいと願っております」と話しています。

02 「CAREプログラムの 実際」をテーマに公開講演会



公開講演会「CAREプログラムの実際―研究と実践に学ぶ」を1月26日(木)、天王寺キャンパス・ミレニウムホールで開催しました。

CAREとは、米国のシンシナティ子ども病院のトラウマ治療研修センターで開発された、子どもと関わる大人のための心理教育的介入プログラムです。講師は、アメリカ・シンシナティ大学のバーバラ W. ボート博士(DR. Barbara W. Boat)で、CAREプログラムの開発者であり、実践家へのトレーニング部門のディレクターです。

このプログラムでは、落ち着きがなかったり、困った行動をしてしまいがちな子どもとの関係を、今より良好に、互いの絆を強めることをめざしています。

ボート博士は、「“ドアを開けてくれたのが嬉しい”“時間通り勉強をやり遂げたことが素晴らしい”など、子どもが何をどのようにほめられているのかが分かるように具体的に声を掛けるのがポイント」など、母親と娘のデモンストレーションなどをまじえながら、場面場面でのように効果的なやりとりをしたらいいのか、

アドバイスをを行いました。

03 DAIKYO PRESSが 「放射能」についての勉強会



学生広報グループDAIKYO PRESS(大教プレス)が、1月25日(水)に「放射能」についての勉強会を柏原キャンパスで開催し、本学学生約20人が参加しました。

今回の勉強会は、将来教師や親となった時、「放射能」について子どもにきちんと伝えるために、基本的な知識を身につけることを目的としています。

講演では、まず鵜澤武俊准教授(教養学科自然研究講座)が、放射線の単位や除染について、実際に「GM管式サーベイメーター」(携帯用放射線測定器)を使いながら説明しました。さらに、松本鉄也教授(教養学科健康生活科学講座)が、人体の影響について、医療現場の写真などを使い説明しました。

学生は熱心に耳をかたむけ、講演後には活発な質疑応答が交わされました。最後に、子どもに伝えていくために「今日からできること」をテーマに学生同士で意見交換が行われました。

<キリトリ>

郵便はがき

5 8 2 8 7 0 5

(受取人)

大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1

大阪教育大学管理部企画課

広報室行

料金受取人払郵便

柏原支店
承認

11

差出有効期間
平成24年9月
20日まで

切手不要



※該当する番号を○で囲んでください

あなたのご所属を教えてください

- | | | |
|-----------|----------|----------|
| ①本学学生 | ②本学卒業生 | ③本学保護者 |
| ④本学教職員 | ⑤附属学校生 | ⑥附属学校保護者 |
| ⑦附属学校卒業生 | ⑧附属学校教職員 | ⑨名誉教授 |
| ⑩教育委員会関係者 | ⑪他大学教職員 | ⑫他大学学生 |
| ⑬その他 () | | |

X<キリトリ>

本誌にご意見をお寄せください。

広報室では、今後の誌面づくりに皆様のご意見を積極的に取り入れていきたいと考えています。ご感想やご意見、大阪教育大学についてお知りになりたいことなどを、はがきまたはwebアンケートでお聞かせください。

天遊vol.21
webアンケート



「天遊」とは

「天遊」は、荘子の言葉から引用されたもので、人間の心の中に自然に備わっている余裕をあらわしています。キャンパス統合移転の記念に旧師範学校以来の同窓会3団体から寄贈された記念碑に銘文として刻まれています。記念碑の揮毫は、水嶋昌(山耀)本学名誉教授によるものです。



本紙は再生紙を使用し、環境にやさしいベジタブルインキで印刷しています。この印刷物は、16,000部を826,200円で、すなわち1部51.64円で作成しました。

